

命を守る親切

福岡県 若松中央小学校 6年 飯吉 晴菜

私は親切というと、ちょっとした思いやりやさしさのことだと思っていました。しかし、夏休み中に知った一つのニュースで、親切にすることが時には誰かの命を救えるということ学びました。

それは、盲導犬を連れて人が駅のホームから転落してしまい、電車にはねられて亡くなられたというものです。その人が足をふみ外す前に駅員さんが気づいて、「お下がりください」と放送されたようです。遠くにいたために放送したのかもしれませんが。このアナウンスが届いていればと、くやまれます。

でも駅では、「線の内側に下がってください」というアナウンスは、日常的にかかっています。目の見えない方は、自分が線の内側にいるかどうかを判断するのも難しいと思いました。

お母さんが、

『『下がってください』ではなく、『危ない、止まって』と言えれば助かったかもしれないね』と言いました。私はそのことに共感しました。「止まって」と言われるとびっくりして、止まるのではないかと思ったからです。

もしかしたら、大丈夫かもしれないのに大きな声で注意するのは、勇気がいることかもしれません。でも、相手を思って行動したり心をつくすことにためらってはいけません。

この事故のあとに、目の不自由な方たちが「声をかけてもらえると助かる」と話されていました。目が見えないと、手助けしてくれる人を見つけるのも大変だと思います。相手から声をかけられる前に、こちらから声をかけることが大切です。

私はある駅でのできごとを思い出しました。杖をついてどこかを探されている人を見かけたとき、とっさに「どうされましたか。手伝いますよ」そう言えばいいとわかっていたのに、そのうち解決されるかもしれない、駅員さんがやってくれる、そうも思ってしまったことです。

このときは、私のお母さんがその人に肩をかして、電車まで案内しました。「階段でよろしいですか？段がなくなって、少しフラットになりますよ」。お母さんの声に「はい」と返事をしているその人の声は、明るくうれしそうで、「自分でできるのに迷惑している」といった雰囲気は全然ありませんでした。

もしだれも手伝わずにいたら、目的の場所へ行くのに時間がかかるだけでなく、今回のような悲しい事故が起こるかもしれないと思うと、本当に見ているだけではなく、声をかけていきたいと思いました。

また、ニュースでは、安全柵の設置がされていれば、という話もありましたが、それ以上にみんなが行動すれば、体が不自由な方たちも生活しやすくなると思います。